慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	中世末期日本語の〈語〉と〈語〉表記：『天草版平家物語』前半の分かち書きから
Sub Title	The word and how to divide the words in writing in late medieval Japanese
Author	屋名池, 誠(Yanaike, Makoto)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2014
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.106, (2014. 6) ,p.170 (211)- 192 (189)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01060001-0170

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

中世末期日本語の〈語〉と〈語〉表記
――『天草版平家物語』前半の分かち書きから――

屋名池　誠

1. 問題の所在

大英図書館所蔵の天下の孤本『天草版平家物語』は、『イソポのハブラス（天草版イソポ物語）』とともに、中世末期の日本語の実態を今に伝えてくれるローマ字書き・口語体のかけがえのない存在であるが、そのローマ字書きは前半と後半で分かち書きの基準が変わっていることがつとに知られている[(1)]。『平家物語』の後にあって同じ書物[(2)]の第2部、第3部をなしている『イソポのハブラス』、『金句集』も、『平家物語』後半の分かち書き基準を引き継いでおり、また、三部全体の総序と『天草版平家物語』編述者不干ハビアンの自序も書物全体の冒頭に置かれているにもかかわらず（その直後に続く『平家物語』前半ではなく）書物後半のこの基準に拠っている。

『平家物語』後半・『イソポのハブラス』・『金句集』・序文類の分かち書きは文節単位のものであることは一見して明白だが、『平家物語』前半のものは「体言につく助詞の『が』『の』『に』『を』『は』などを、初めには体言から離して書き」（土井忠生（1942）p.56）といわれてきたものの、実は文節単位でないのは体言につく助詞ばかりではない。前半の分かち書き状況については井上（1961）のかなり詳細な調査があるが、現象記述にとどまっており、その背後にある原理については今日に至るまで明らかになっていない。

本稿は、『天草版平家物語』前半の分かち書きの実態を精査して、それが私がその設定の必要を唱えている〈語〉という単位を基準とするものであることを明らかにするとともに、今まで知られていなかった二つの重要な

日本語史上の事実――一つは「〈語〉の拡張」という形態論的な歴史的変化の存在、今一つは古代から連綿と続く〈語〉を単位とする表記法の存在――を指摘しようとするものである。

2.『天草版平家物語』の分かち書きの実態

2.1.　先行研究の指摘通り、格助詞（後置詞）ガ、ヲ、ニ、ヘ、デ、カラ、ヨリ、マデは、『平家物語』前半では名詞と分けて表記され、後半では名詞に続けて表記されている。ヲとニを例にその直前で分かち書きがされているか否かを記号で示し、その分布をページごとに出現順で示すと次のようになる[(3)]。

数字は原本のページ（数字のみで「▽」「◆」の記号のないのは用例のないページ）、名詞と後続の格助詞が分けて表記されている箇所を「▽」、続けて表記されている箇所を「◆」で表す。「＊」は名詞が行末にあり続く助詞が行頭にくるため分かち書きの対象にならない箇所であることを示し、「？」は空白の幅が微妙なため有無の判定を保留した箇所を示す。切り替え箇所は「巻第三」の途中なので、「巻第三」末尾（p.224）までをあげ、前半も後半とほぼ同量となるよう、p.190からあげた。

ヲ　190▽▽▽▽▽▽▽ 191▽▽▽▽▽▽▽ 192◆▽▽▽▽▽▽▽▽▽ 193▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽ 194▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽ 195▽▽＊▽▽▽▽▽▽▽▽ 196▽▽▽ 197▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽ 198▽▽▽▽▽▽▽▽ 199▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽ 200▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽ 201▽▽▽▽▽＊▽ 202▽▽▽▽▽▽▽▽▽ 203▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽ 204▽▽▽▽▽＊＊▽▽▽▽▽▽▽ 205▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽ 206▽▽▽▽▽ 207◆◆◆◆◆◆◆◆◆▽◆◆ 208◆▽＊▽▽ 209▽◆▽◆▽◆▽◆▽▽▽▽▽◆ 210◆▽◆◆◆◆▽ 211◆？◆◆▽◆◆◆◆ 212▽▽▽▽▽▽◆◆▽▽▽▽◆◆◆◆ 213▽＊◆＊◆◆◆◆▽◆◆◆◆ 214◆◆▽◆◆▽◆▽◆◆◆ 215＊◆◆▽◆◆▽▽◆ 216◆◆◆◆◆＊◆＊◆▽◆◆ 217◆◆▽▽◆◆◆◆◆◆◆◆◆ 218◆◆◆◆◆◆◆ 219

◆◆◆◆▽◆◆◆◆ 220◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆＊◆ 221
◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆ 222◆＊◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆ 223
◆◆＊◆◆◆◆＊ 224◆＊◆

ニ 190▽＊＊▽ 191▽▽◆▽▽▽▽ 192▽▽◆▽ 193◆▽▽▽
▽▽▽▽▽ 194▽▽▽ 195▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽ 196▽▽▽
▽▽◆ 197▽▽＊▽▽▽▽▽ 198▽▽▽＊▽◆▽ 199▽▽？▽▽？
▽ 200▽▽▽▽▽◆▽▽▽ 201？▽▽＊▽▽◆▽▽▽◆ 202▽◆▽
▽▽▽ 203▽▽▽▽▽▽▽ 204▽▽＊▽▽＊▽◆▽▽▽▽▽▽ 205
＊▽▽▽▽＊▽▽▽▽ 206▽▽▽▽▽▽◆▽▽▽▽ 207▽＊◆◆
◆◆◆◆◆ 208◆◆◆◆◆ 209◆◆◆◆◆◆ 210＊◆◆＊▽
▽◆◆▽ 211▽▽▽▽◆◆◆ 212◆◆◆▽◆◆▽＊ 213▽◆
214◆◆◆◆◆◆◆◆▽◆◆ 215◆◆▽▽◆◆◆◆◆ 216◆◆
◆◆▽◆ 217◆◆◆◆◆◆ 218◆◆◆＊？ 219▽▽◆◆◆◆
◆▽▽▽ 220◆◆◆◆◆◆▽◆ 221◆◆◆◆◆◆ 222◆◆◆◆
◆◆◆ 223◆◆◆◆◆◆◆◆◆ 224◆◆◆◆◆◆◆

2.2. 補足語と述語の関係を表示する狭義の格助詞だけでなく、名詞と名詞をつなぐ連体助詞ノ、ガ、ヤでも同様の状況が見られる。

ノ 190▽▽◆▽▽▽▽？◆ 191▽▽▽▽＊▽ 192▽＊▽▽◆▽
▽▽＊▽▽◆ 193▽▽▽▽▽▽？▽▽▽＊◆▽ 194▽▽▽▽▽▽
▽▽▽▽▽▽▽▽ 195▽▽▽▽▽▽＊▽？▽▽▽▽▽＊▽▽ 196
＊▽▽▽◆▽▽▽ 197▽▽▽◆▽▽▽◆▽▽▽▽ 198▽▽▽▽＊
◆ 199▽＊▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽ 200▽▽＊▽▽▽▽▽▽▽▽▽
▽▽▽ 201＊▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽ 202▽▽▽▽▽＊▽▽ 203▽
▽▽▽▽ 204▽▽▽＊▽▽▽▽▽▽▽▽▽ 205▽▽▽▽▽◆▽▽
206▽▽▽▽▽▽ 207◆◆◆▽◆◆◆ 208◆◆◆◆▽▽◆▽
209▽▽◆＊▽▽▽▽▽ 210◆◆◆◆◆◆◆◆＊◆ 211◆▽
◆◆◆◆◆◆◆◆ 212◆◆◆◆▽ 213◆▽◆▽▽◆◆◆◆▽

214◆◆＊▽▽◆　215▽▽◆　216▽◆◆◆◆◆◆◆◆　217▽◆◆▽▽　218◆▽◆◆◆　219▽▽◆◆▽◆◆◆◆▽▽　220◆◆▽◆◆◆◆◆＊◆◆　221◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆　222◆◆◆◆◆◆◆◆◆＊　223◆▽◆◆◆◆◆◆◆　224◆◆◆◆◆◆◆

2.3.　格助詞、連体助詞ばかりでなく、係助詞ハ、モ、ヤでも同様である。ハの例をあげる。

ハ　190▽＊▽▽？▽　191▽▽＊▽◆▽▽◆　192▽▽▽▽▽▽▽▽◆　193▽▽▽▽▽　194▽▽▽▽▽　195▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽　196▽▽▽▽▽▽▽　197▽▽▽　198▽▽▽▽▽◆　199▽▽▽▽▽？▽▽　200▽▽▽◆▽▽　201◆＊▽▽◆◆　202▽▽▽▽▽▽　203◆▽▽▽▽▽　204▽▽▽▽▽◆　205＊▽▽◆▽▽▽▽▽▽　206▽▽▽▽▽▽▽　207◆＊◆◆◆◆　208▽◆◆◆◆◆▽　209◆▽▽◆◆　210◆＊◆◆◆◆◆▽　211▽◆　212◆◆◆　213▽▽▽◆　214◆◆▽◆◆◆◆　215＊▽◆◆◆▽◆◆　216◆▽▽▽◆◆　217◆◆◆◆▽▽◆　218◆▽◆＊◆　219＊▽◆◆◆◆　220◆◆◆▽◆　221◆◆◆◆◆◆　222◆◆◆◆　223◆◆◆◆◆◆◆　224◆◆◆◆◆◆◆

2.4.　名詞に続く助詞ばかりがこうなのではない。文末にあらわれる［疑問］表示の文末のカ、接続助詞（従属接続詞）のドモ、トモ、ナガラ、終助詞のゾ、カシ、［引用］のトなどの表記も同様の分布を示す。

文末の力（文中への挿入句も含む）　190▽▽　191▽▽▽　192▽　193　194▽　195　196▽　197　198　199　200　201▽　202　203▽　204◆　205▽▽▽▽　206◆　207　208　209▽　210　211　212　213　214　215　216　217＊◆　218　219◆◆　220◆◆◆　221▽◆　222　223◆◆　224

ドモ　190▽　191▽　192▽　193▽　194　195▽　196▽▽　197　198▽▽　199▽　200＊　201▽　202◆▽▽▽　203　204▽▽　205▽　206◆　207▽◆　208▽▽

209◆ 210 211 212 213◆◆ 214 215◆◆ 216◆◆ 217◆ 218▽ 219 220 ◆ 221 222 223◆ 224◆

トモ（用例が少ないので、用例のないページは飛ばして全例をあげる。以下も同様）
17▽ 31▽ 32▽ 39▽ 42▽ 43▽ 46▽ 49▽ 57▽ 71▽ 74▽ 75▽ 84▽ 92 ▽ 95▽ 97▽ 99▽▽ 100▽ 101▽ 104▽ 113▽ 118▽ 130▽ 137▽ 147▽ 157▽ 160 ？ 165▽ 171▽ 172◆ 176▽ 180▽ 181▽ 182▽ 189▽ 202▽ 215▽ 220▽ 232◆ 234◆◆ 252◆ 257◆ 258◆◆ 272◆ 277◆ 281◆◆ 282◆ 288◆ 296◆ 307◆ 312◆ 314◆◆ 320◆ 323◆ 331◆ 356◆ 361 ◆ 364◆ 373◆ 385◆ 387◆ 390◆ 392◆ 397◆ 408◆

ナガラ 8▽ 25▽ 44▽ 46▽ 48▽ 66▽ 72▽ 75▽ 88▽▽ 91▽▽ 110 ▽ 111▽ 114▽ 131▽ 135▽ 142▽ 161◆ 180▽ 183▽ 206◆ 224▽ 231▽ 236◆ 247▽ 268◆ 272◆ 280◆ 302◆ 305◆ 317◆ 331◆ 355◆ 364◆ 399◆

2.5. 助詞の表記は、名詞に付くか否かを問わず、すべてこうした分布を示すというわけでもない。

いわゆる接続助詞のテや「未然形接続のバ」「已然形接続のバ」は、全巻を通じて、分かち書きされず先行部分と続けられている。

2.6. 他方、とりたて助詞（副助詞）ノミ、バカリ、ダニ、サエ、係助詞コソは全巻通して前の名詞と分けて表記されている。

2.7. 助詞と並んで伝統文法で「付属語」とされる、いわゆる「助動詞」はどうなのかというと、これらは（全巻にわたって分かち書きされるゴトシとヤウニを除き）、すべて全巻にわたって先行部分に続けて書かれている。

ス／サス、ル／ラル
タイ
タリ（タ）、リ
ズ、ヌ

ケリ、（シ・シカ）

ベイ、マジイ、マイ

ウ、ウズ、ロー、ツロー

2.8.　助詞だけではなく、複合動詞の前項、後項の間を分かち書きするかどうかも前半と後半で異なる状況をしめしている。ヒキ -、オモイ - を前項とする複合動詞の例をあげる。

ヒキ -　5▽ 15▽ 16 ▽17▽ 19▽ 24▽ -18▽ 25▽▽▽ 25▽▽ 28▽ 29▽▽ 30 ＊▽ 31▽ 44▽◆◆▽◆ 48▽ 61◆ 65▽ 76▽ 82▽ 103▽ 108◆ 111▽ 112◆◆ 116◆◆ 117◆◆ 125▽◆◆ 126◆ 127▽ 130◆ ◆131 ？ 132▽ 159▽ 163▽ 164＊▽ 168▽▽▽ 169▽◆ 170◆ 177＊ 181 ◆ 184▽◆ 188◆▽ 189＊ 192◆ 205◆◆ 207◆ 209◆ 211◆ 213◆◆ 214◆ 216◆◆ 231◆◆ 236◆ 237◆ 245◆ 247◆ 252◆ 253◆◆ 265 ◆ 266◆ 267◆ 269◆ 270◆ 271◆ 272◆◆ 274◆ 275◆ 279◆ 283◆◆ 284◆ 289◆ 303◆ 309◆ 323◆◆ 328◆◆◆ 335◆ 338◆ 345◆ 350◆ 358◆ 359◆ 363◆ 365◆ 373＊ 377◆◆ 378◆ 380◆ 384◆ 392◆ 397 ◆ 398◆ 406＊

オモイ -　15＊ 24▽ 29▽▽ 32▽ 34▽ 41▽ 43▽ 45▽ 50▽ 66▽ 74▽ 75▽ 82▽▽ 83◆ 87▽▽ 88▽ 93▽ 95▽ 97＊ 103▽ 104▽▽ 105◆ 113 ◆ 114▽ 142▽ 143▽ 183＊ 185▽ 192◆ 200◆◆▽ 205▽ 216◆ 218◆ 229◆ 232◆▽＊ 243◆ 256◆ 265◆ 280 ？▽ 281◆▽ 284◆ 285◆ 288◆ ▽ 289＊ 298 ◆300◆ 305▽ 308◆ 310▽◆＊ 318◆ 324◆ 334◆◆ 348 ◆ 349▽ 358◆ 361◆ 363▽ 365◆ 369◆ 378◆ 379◆ 399◆

2.9.　名詞につづく判定詞ヂャ・デ・ナリ、いわゆる「形容動詞」のヂャ・デ・ニの部分は全巻を通して先行部分と分けて書かれている。

2.10.　一方、形容詞の「カリ活用」部分には全巻にわたり分かち書きは見られない。

2.11.　こうした前半部分の分かち書きの基準となる単位は、

・いわゆる「助詞」の大部分を分かち書きする

・複合動詞前項を後項から切り離して書く

という点で伝統文法の単位である「文節」とは異なり、

・いわゆる「助動詞」の大部分を分かち書きしない

・接続助詞のテ、「未然形接続のバ」、「已然形接続のバ」を分かち書きしない

・複合動詞前項を後項から切り離して書く

という点で伝統文法の「単語」とも一致しない。つまり、伝統文法の設定している「単語」、「文節」という言語単位の範囲には、この前半部分の分かち書きの基準とするに足るものは見当らないのである。しかし、整然とした使用状況から十分みてとれるように、この分かち書きは決して無秩序なものではない。

『平家物語』前半の分かち書きの基準となる単位としては、「助詞」、「助動詞」の分かち書きの状況から見て、伝統文法の「単語」よりは大きく、「文節」より小さい単位を想定する必要があるが、一方で複合動詞の前項と後項とを別単位と認めるようなものである必要もある。

わたしは以前から〈語〉という形態論的な単位を設定する必要を唱えているが、この『天草版平家物語』前半の分かち書きは、この〈語〉を基準の単位としている可能性が高い（伝統文法の「単語」と区別するため、以下〈語〉と呼ぶ）。

以下、3節～6節で、このように考える根拠を示してゆく。

3. 現代の〈語〉

3.1.　日本語の伝統文法の「単語」は word と morpheme（形態素）を混同したヌエ的な存在であって、諸言語における word に相当するものではない。日本語文法独得のいわばガラパゴス的単位である。

それに対し、私の唱えている〈**語**〉は日本語で word に相当するものとして設定される単位である。

・形態素一つで、または複数の形態素が組み合わさって構成される、階層上、形態素の一つ上位の有意味単位

・単独で日常の発話にあらわれる、実用的なレベルでの最小単位、すなわち最小発話単位

であって、形態素とははっきり区別される、別の単位である。

3.2.　形態素は実用レベルの単位である〈語〉とは異なり、〈語〉の部品にすぎない。形態素はそれだけでは現実の発話に現れることはできないので、日本語の母語話者であっても動詞語幹のような形態素を正確に抽出することは難しい。そもそも形態素である動詞語幹などには、はえぬきの日本語話者が実際に発音できない、子音終わりのもの（子音終わり語幹動詞＝強変化動詞＝五段活用動詞の語幹）さえあるのである。「よませられたらしかったでしょうね」を伝統文法に従って単語に分解する（「よま」「せ」「られ」「た」「らしかっ」「た」「でしょ」「う」「ね」）のが難しいのは、「単語」が形態素にすぎないものもふくんでいるからである。

3.3.　〈語〉は母語話者にとって決して目新しい単位ではない。息継ぎは、意味の聞き取りを阻害しないように、〈語〉と〈語〉の境でおこなわれるから、〈語〉は最小呼気段落でもある。アクセントも〈語〉を単位として決まっているので、〈語〉は「アクセント単位」でもある。これらの外形的特徴を目安にすれば、だれでも容易に取り出すことができる単位なのである。「よませられたらしかったでしょうね」を

「よませら▽れた」◉「らし▽かった」◉「でしょ▽う」◉「ね」

と〈語〉に分解するのは、文法など学んだことがなくても誰でも容易にできるのである（▽は東京方言の場合のアクセントの下がり目で、１アクセント単位に一つだけ出現できる。◉は息継ぎが可能な位置）。

3.4.　伝統文法でいう「助詞」のうち、名詞につづく「助詞」はみな独立の〈語〉である。

伝統文法でいう「助詞」のうち述語部分にあらわれるもの及び伝統文法

でいう「助動詞」は独立の〈語〉であるもの（服部四郎（1950）のいう「附属語」）と、〈語〉の構成要素にすぎないもの（同じく服部四郎（1950）のいう「附属形式」）とにわかれる。前者は立派に助詞、助動詞といえるものであるが、後者は形態素にすぎないのだから、本来、助詞とか助動詞とか呼ばれるべきものではないのである。従来、「単語」として同列にあつかわれてきたものを〈語〉と形態素にしわけると次表のようになる。

	〈語〉の構成要素 ＝ 形態素	**〈語〉**（次表の★）
「助詞」	【動詞の要素】ツツ、ナガラ	ノデ、ノニ、モノノ
	ニ［目的］、テ、タラ、タリ、	カラ、ガ、ケレド（モ）、シ
	ズニ、ナイデ、バ（eba）	カ
	ナ（una）［禁止］	ゾ、ゼ、サ、ヨ、ネ、ナ
	【形容詞の要素】カッタラ（kaQtara）	
	カッタリ（kaQtari）、ケレバ（kereba）	
「助動詞」	【動詞の要素】レル／ラレル（are）	ダ、デス
	セル／サセル（ase）、マス（mas）	ヨー（ダ）、ソー（ダ）、ラシイ
	タイ（ta-）、ナイ（na-）	ダロー、デショー
	タ（ta）、ウ／ヨウ（OR）	
	【形容詞の要素】カッタ（kaQta）	

※（ ）内は形態素分析によって抽出される精確な音形。詳しくは屋名池（2004）参照

3.5.　〈語〉ではなく、〈語〉の構成要素である形態素にとどまるもの（セル／サセル、レル／ラレルなど）は、動詞なら動詞にしか付かない。たとえば、動詞でヨマセル、ヨマレルとはいえても、形容詞でウレシセルとかウレシレルなどとはいえないし、名詞につけて学生デセルとも学生デレルともいえない。動詞の部品にすぎないからである。一方、〈語〉であるもの（ダロー、ラシイなど）はさまざまな品詞の語につくことができる。動詞に付けてヨムダロー、ヨムラシイとも、形容詞に付けてウレシイダロー、ウレシイラシイとも、名詞に付けて学生ダローとも学生ラシイともいうことができる。動詞や形容詞、名詞とは別の〈語〉だからである。

伝統文法では抽出を誤っているものもあるので注意が必要である。過去テンスを示す形態素は動詞ではタであり、これは動詞にしか付かない。形容詞に付くのはカッタであって、タではない。バも動詞にしか付かず、形容詞にはケレバが付くのである。

3.6.　〈語〉の構成要素である形態素（セル／サセル、レル／ラレルなど）はそれだけを取り出して使うことができないのに対し、〈語〉であるもの（ダロー、ラシイなど）は独立しての使用が可能である。

形態素　A：こどもを一人で行かせるの？
　　B：＊せるよ。／行かせるよ。
〈語〉　A：一人でも行けるだろう。
　　B：だろうね。

3.7.　〈語〉はだいたいにおいて伝統文法の「単語」より大きいのだが、逆に小さくなる場合もある。いわゆる「形容動詞」や、漢語サ変動詞（漢語部分が多拍のもの。信用スル、添付スル、到達スルなど）は「単語」としては1単位あつかいされているが、〈語〉の観点からすると、ダ、デスやスルは独立の〈語〉であり、いわゆる「形容動詞」語幹や漢語動詞の漢語部分と、2〈語〉で1セットとなって働いているものと見ることになるからである（[いわゆる「形容動詞」語幹＋ダ / デス]、[漢語部分＋スル]）。

名詞につづくダ / デスも独立の〈語〉である。

一方、漢語部分が1拍の漢語動詞（信ジル、付ス、達スルなど）は、多拍のものとは異なり、本来スルであった後部は前部と融合して全体で1〈語〉の動詞となっており、活用も規則動詞化していることが多い。

3.8.　以上、〈語〉と「単語」とのちがいを中心にみてきたが、〈語〉は「単語」と異なる単位であるだけでなく、文節ともちがう単位である。〈語〉と文節とのちがいについてもまとめておこう。

現代語の〈語〉については屋名池 誠（2011）で論じたので、さらに詳しくはそちらをご参照いただきたい。

	〈語〉	文節
名詞につづく助詞	名詞とは別語	名詞と同じ文節
前表で★としたもの	動詞・形容詞とは別語	動詞・形容詞と同じ文節
「形容動詞」末尾のダ・デス	「形容動詞語幹」と別語	「形容動詞語幹」と同じ文節
名詞につづく判定詞のダ・デス	名詞と別語	名詞と同じ文節
漢語外来語多拍動詞末尾のスル	漢語外来語部分と別語	漢語外来語部分と同じ文節（別文節という考え方も？）

4. 平安時代の〈語〉

4.1. 〈語〉はアクセント単位でもあるので、平安時代京都方言の〈語〉は、その時代のアクセントから知ることができる。この時代のアクセント史料としては『類聚名義抄』が著名であるが、これは漢和辞典の和訓に付された声点を資料とするものだから、名詞はともかく、動詞・形容詞は終止形ばかりで、さまざまな活用形態を知ることはできない。動詞・形容詞の形態の種々相は『日本書紀』（平安期書写の岩崎本・前田本・図書寮本・北野本）の本文や傍訓に付された声点に拠らなければならない。

4.2. 伝統文法でいう「助詞」のうち、名詞に続くものは現代語同様、独立の〈語〉である。

伝統文法でいう「助動詞」は表に見るとおり現代語と同様、形態素にすぎないものと、〈語〉であるものとにわかれる。

〈語〉の構成要素 ＝ 形態素	〈語〉
ル / ラル (are)、ス / サス (ase)、シム	ツ、ヌ、リ、タリ
ズ、ヌ・ネ［否定］、シ・シカ	キ、ケリ、ケム
ム、ジ、ベシ、マシジ	ラシ、ラム、ナリ［推定］

名詞や「形容動詞」につくナリも、現代語のダやデスと同様、独立の〈語〉である。

4.3.　一方、現代語との相違点も重要である。

動詞の「連用形」、「終止形」、「連体形」、「已然形」はそれだけで1〈語〉をなす。よって、それらにつづくいわゆる「助詞」「助動詞」は先の表で形態素としたシ・シカ、ベシ、マシジをのぞき、すべて独立の〈語〉である。「読んで」「起きて」「読めば」「起きれば」「読んだ」「起きた」は現代語では1〈語〉の動詞で、全体で一つのアクセント単位をなしているが、平安時代語では「読み」「て」、「起き」「て」、「読め」「ば」、「起くれ」「ば」、「読み」「たり」、「起き」「たり」がそれぞれ〈語〉であり、テやバ（「已然形接続のバ」）、タリはアクセント上独立しているのである。ナガラ、トモも独立の〈語〉であった。

一方、「未然形」は1〈語〉をなさず、それに続く要素とともに〈語〉をなしている。「読まば」「読まず」「読まむ」はそれぞれ全体で1アクセント単位なのである。

また、当時の複合動詞は、現代語のように前項・後項が、一つの〈語〉として一体化しておらず、形容詞のいわゆる「カリ活用」部分も「～ク」と「アリ」のアクセントを残しており、それぞれ独立の〈語〉であった。

平安時代語の〈語〉については、アクセントの観点から屋名池 誠（2004）でその認定手順もふくめて論じている。ご参照いただきたい。

5.〈語〉の大きさの、時代による変化

5.1.　鎌倉時代の声明『四座講式』の譜や『御巫本日本書紀私記』の声点にあらわれたアクセントから知られる、鎌倉時代京都方言の〈語〉のありかたも補って、各時代の〈語〉をくらべてみよう。

5.2.　動詞・形容詞において、〈語〉が、協働して構文機能を果たしていた後続の別〈語〉を飲み込んで内部要素化してゆくという、形態論的には活用の変化以上に重要な大きな歴史的変化が起きていることが見て取れる。

	平安	鎌倉	現代
	日本書紀声点	四座講式 御巫本私記	
動詞+ヴォイス、肯否、主要モダリティ要素 動詞+バ（「未然形接続のバ」）	○	○	○
動詞＋テ	×	○	○
動詞＋タリ 動詞＋バ（「已然形接続のバ」） 形容詞「カリ」活用部分	×	×	○
動詞＋動詞（複合動詞）	×	×	○
動詞＋ナガラ、トモ、ドモ	×	×	○
名詞＋判定詞 「形容動詞」＋語形変化部分 名詞＋助詞	×	×	×

○：1〈語〉（1アクセント単位）となっている
×：2〈語〉（2アクセント単位）に分かれている

しかし、鎌倉時代と現代の間の〈語〉のありかたの変化はアクセント史料からは知られない。近世のアクセント史料としては『補忘記』や、平曲・浄瑠璃の譜本があるが、『補忘記』は基本的に語彙集であって言語単位を知るには適していないし、平曲や浄瑠璃の譜本は、平安期の声点資料や、鎌倉期の声明譜本とは異なり、その前後の時代のアクセントから当代のアクセントを推定し、その一致するものが曲譜に存在することから、その推定を確認するという、いわば「傍証資料」なので、これも当時のアクセント単位がどういうものであるか知るのにはほとんど役に立たないのである。

6. 中世末期の〈語〉

6.1.　こうした平安時代・鎌倉時代と現代の〈語〉のありかたを踏まえて、『天草版平家物語』前半の分かち書きを見直してみよう。

『天草版平家物語』前半の分かち書き単位が〈語〉であるとすると、

・名詞につづく助詞は分かち書きされる

・ヴォイス、肯否、主要なモダリティ（ウ（平安ム）、ベイ（平安ベシ）、マイ・マジイ（平安マシジ）など）の要素、［仮定］をあらわすバは分か

ち書きされない

・名詞につづくヂャ / デは、名詞と分かち書きされる

・いわゆる「形容動詞」の語幹と後続部分（ヂャ / デ）は分かち書きされる

は平安・鎌倉時代語の〈語〉とも、現代語の〈語〉とも一致し、

・動詞とテは分かち書きされない

は鎌倉時代語・現代語の〈語〉と一致し、

・複合動詞前項と後項は分かち書きされる（ことが多い）

・動詞とナガラ、トモ、ドモは分かち書きされる

は平安・鎌倉時代語の〈語〉と一致し、

・動詞とバ（いわゆる「已然形接続のバ」）、タリ（現代タ・タラ・タリ）は分かち書きされない

・形容詞の「カリ活用」部分は分かち書きされない

・漢語部分が1拍の漢語動詞は、漢語部分と後続部分は分かち書きされない

・漢語部分が多拍の漢語動詞は、漢語部分と後続部分は分かち書きされる

という特徴は現代語の〈語〉と一致している。

6.2.　これを〈語〉の歴史上に位置付けてみると、次表のようになり、まさに、鎌倉時代と現代の中間の様相を呈していることがわかる。『天草版平家物語』前半の分かち書き単位は、当時の〈語〉であると見てよいだろう[(4)]。

鎌倉時代とアクセント単位そのものは変わっていないのだが、ここではいわゆる「準アクセント」を反映した表記になっているだけだと考えることはできない。前代とのズレは特定の語形にのみあらわれているからである。

6.3.　この分かち書きの基準となっている単位が当時の〈語〉であることが明らかになったことで、「**動詞・形容詞語形の拡張**」という大きな歴史的変化のプロセスの細部も明らかになる。

・この時代にはすでに動詞が後続のバ（「已然形接続のバ」）を飲み込んでいたが、ナガラ、トモ、ドモまでは飲み込んでいなかった。

	平安	鎌倉	戦国	現代
	書紀声点	四座講式 御巫本私記	天草平家前半	
動詞＋ヴォイス、肯否、 主要モダリティ要素 動詞＋バ（「未然形接続のバ」）	○	○	○	○
動詞＋テ	×	○	○	○
動詞＋タリ（タ） 動詞＋バ（「已然形接続のバ」） 形容詞「カリ」活用部分	×	×	○	○
動詞＋動詞（複合動詞）	×	×	△	○
動詞＋ナガラ、トモ、ドモ	×	×	×	○
名詞＋判定詞 「形容動詞」＋語形変化部分 名詞＋助詞	×	×	×	×

・動詞はタリ / タやロー（平安ラム）を、形容詞は「カリ活用」部分のアリを内部要素化していた。

・複合動詞は分かち書きされることが多いが、されていない例も散見するので、1〈語〉化が徐々に進みつつあったのかもしれない。

・漢語部分が1拍の漢語動詞はすでに全体で一語化していた。

アクセント史料の欠落を補う重要なデータであるといえるだろう[(5)]。

6.4.　1拍の漢語動詞（分かち書きせず）、多拍の漢語動詞（スを分けて表記）、名詞に続く判定詞ヂャ・デ・ナリ（名詞と分けて表記）、いわゆる「形容動詞」（ジャ / ナ / ニなどを分けて表記）、ノミ、バカリ、ダニ、サエ、コソ（先行の名詞と分けて表記）── これらの分かち書きは、文節単位の分かち書きをしている後半部分でも、前半部分とおなじありかたになっている。これは現代と文節の大きさが変化しているわけではなく、後半部分での文節の捉え方が現代通行の伝統文法説とは異なっていることからくるものであろう。多拍の漢語動詞のスルや、いわゆる「形容動詞」のダ、デスを独立の単位と認めるかどうかは伝統文法でも議論のあるところだからである。

7.〈語〉表記の歴史

〈語〉はだれにでもわかりやすく、取り出しやすい単位である。これを表記の基準としたのは『天草版平家物語』前半だけではない。実は「**〈語〉表記**」は広く長くおこなわれていた、ごくありふれた表記法だったのである。

7.1.　キリシタンの後に、日本語をローマ字表記したのは、幕末・明治初期に来日した欧米人たちである。彼らの手になる

会話書 —— ブラウン（Samuel Robbins Brown）の *Colloquial Japanese* やサトウ（Ernest Mason Satow）の *Kuaiwa Hen*

文法書 —— アストン（William George Aston）の *A Grammar of the Japanese Spoken Language* やチェンバレン（Basil Hall Chamberlain）の *A Handbook of Colloquial Japanese*

辞書 —— ヘボン（James Curtis Hepburn）の『和英語林集成』

などは、みな〈語〉単位で分かち書きがされている[(6)]。

7.2.　分かち書きを必要とするのは、ローマ字だけではない。一つ一つの文字が、有意味単位より小さな言語単位と対応する、音素文字や音節文字では、単一文字種を専用すると、〈語〉や文節のような有意味単位が見て取りにくくなり、読解の効率が落ちてしまう。有意味単位を見て取りやすくする工夫が必要となるのだが、これには、有意味単位のまとまりを示す方法（つづけ書き（連綿）など）と、有意味単位間の境界を示す方法（句読点など）がある。分かち書きは、いわば空白（スペース）という句読点をもちいるものだから、後者の方法の一つである。

7.3.　仮名は習ったが漢字はまだ習っていないという段階の小学校低学年児童向けの文章は仮名専用（か、それに極めて近い漢字仮名交じり）だから、やはり分かち書きが必要になる。

戦前の国定国語読本の分かち書きも、実は明治以来、第四期読本（1933年より、一年生用から順次学年進行に従って使用）までは〈語〉単位でおこなわれて

いたのであった。

第五期読本（1941年より学年進行に従って使用開始）からは文節単位の分かち書きに切り替わり、これが現代の検定教科書まで引き継がれておこなわれている。〈語〉単位の分かち書きはそれまで広くおこなわれていたものの、理論的な裏付けがなされていなかったため、非科学的と考えられ、当時最先端の学説として提唱されたばかりの「文節」を取り入れた改変がおこなわれたのであろう。橋本進吉が「文節」の概念を一般に向けて提示したのは1934年の『国語法要説』（『国語科学講座』の1分冊として刊行）が最初である。当時、標準語の発音・アクセント指導などで国語教育界に強い影響力を持っていた神保格なども名称こそ異なるものの同様な単位の必要性を説いていた。

7.4.　戦争中、南方占領地で盛んに行われた日本語教育のためのテキストのローマ字専用表記やカナ専用表記も文節単位の分かち書きのものが多いが、初期のものには〈語〉単位の分かち書きのものも多く見られた。

7.5.　漢字を廃止し、表音文字の単一文字種化を唱える国字改良論の立場からは、分かち書きは大事な問題で、くわしい検討がなされている。日本式ローマ字の田丸卓郎（1920）『ローマ字文の研究』（改訂新版 ローマ字教育会 1952年 による）は文節単位の分かち書きを推奨しているが、カナモジカイの松坂忠則（1943）『ワカチガキノケンキュウ』（シロガネ社）が検討・提案しているのは〈語〉単位の分かち書きである。

7.6.　ちなみに、日本語の点字も単一文字種の表音表記システムで、分かち書きをおこなうが、そのルールをはじめて明文化した「日本訓盲点字」（東京盲学校 1921年。鈴木昭編（2007）による）以来現在に至るまで文節単位の分かち書きがおこなわれており、この分野では〈語〉単位の分かち書きがおこなわれたことはないようである。

7.7.　実は、〈語〉単位の表記は、こうした表音文字専用表記の分かち書きというかたちで現れるばかりではない。上代・中古にも〈語〉単位の表記は存在していたのである。

『続日本紀』宣命や『三宝絵』（表記形態の異なる三種の伝本があるが、そのうち漢字カタカナ交じり表記の観智院本の上巻）、『今昔物語』（現存最古の写本である鈴鹿本）は、日本語を表記するにあたって、漢文の語序ではなく日本語の語順に従っているにもかかわらず、「所知」（しられ）七詔、「不被告」（つげられず）二十詔、「令知流」（しらしむる）二六詔 などのように、ヴォイスの（ラ）ルや（サ）ス、肯否のズ、モダリティのムやベシなど、1〈語〉の動詞（や形容詞）に含まれる範囲にかぎって、日本語の語順によらず、漢文の字序のまま表記している。これは一見、漢文の語順の残存のように見えるが、実は日本語を主体としていればこその表記法なのである。漢字は形態素文字なので、たとえば「しられ」を形態素単位の表記として、動詞語幹の「知」と受け身を表す接辞「所」に分解して「知所」のように表すことはできる。しかし、日本語の表記にあたり、〈語〉単位の表記法を取ろうとすると、1字だけでは日本語の〈語〉を表記することはできない。そこで日本語の1〈語〉に相当する範囲を一体として、漢文から「所知」とそのままのかたちで切り出し、日本語の〈語〉の表記に当てているのである。日本語の形態素に分解すれば逆順となっているように見えるが、「所知」全体で一体となって「しられ」という1〈語〉の表記となっているのである。その証拠に、こうした「**逆順一体表記**」では、送り仮名も、受け身・使役・否定などの表示部分に付くのではなく、「令知**流**」（しらしむ**る**）のように全体の末尾についているのである（詳しくは別稿で論じる予定）。

7.8. 〈語〉を単位とした表記の歴史を、文節を単位とした表記（進藤咲子(1961) などを参照）と対照しつつ簡単な年表にまとめてみよう。

文節は、概念語と機能語の組み合わせからなる単位で、機能重視の単位といえるのに対し、〈語〉は顕著な外形上の特徴を有する形態論上の基本単位であり、その特性を異にする。片方を認めれば、片方は不要になるというものではない[(7)]。

文節が理論的に定義付けられ意識されるようになったのは近代になってからであるが、文節を単位とした表記もそれ以前から長く用いられてきて

〈語〉を単位とした表記		参考・文節を単位とした表記	
〈逆順一体表記〉	〈わかちがき〉	〈わかちがき〉	〈句読点表示＊〉
『続日本紀』宣命			
『今昔物語』(鈴鹿本)			
『三宝絵』 (観智院本上巻)			
			親鸞遺文など＊
	『天草版平家物語』(前半)	**『天草版平家物語』(後半)・ 『イソポのハブラス』**	
	S.R.Brown : *Colloquial Japanese* (1863)		
	E.Satow : *Kwaiwa Hen* (1873) など		
	まいにち ひらかな しんぶんし (創刊当初。1873)	まいにち ひらかな しんぶんし	
		清水卯三郎『ものわりのはしご』 (1874)	
	国定国語読本(第4期 (1933～)まで	国定国語読本(第5期・6期 (1941～))	

いたし、〈語〉を単位とした表記も、それと並んで長く広く使われてきたのであった。にもかかわらず、〈語〉を単位とした表記は、文節単位の表記と異なり、その存在自体気づかれることもなく、ましてやその根拠となる単位の特性が検討されることもないまま、「見れども見えざる存在」として今日に至ったのである。

8.『天草版平家物語』のローマ字翻字者と印刷過程

8.1.　第2節にあげた分かち書きの分布状況からすぐ見てとれるように、分かち書き基準の変更は一挙におきたのではないのだから、途中で翻字者が交替したことによって生じたものと考えることはできない。『天草版平家

物語』のローマ字翻字については、その特異な綴りの遍在状況を根拠にして複数の担当者による分担を推定する研究もあるが（菅原範夫（1989））、この分かち書きの切り替え箇所はそこで論じられている担当範囲とも一致しない。

8.2.　ローマ字書きのキリシタン文献は『平家物語』『イソポのハブラス』以外はみな文語体だが、この書冊（扉（1592年付）・総序（1593年2月23日付）・『平家物語』（ハビアン自序1592年12月10日付）・『イソポのハブラス』（序1593年付））以前に刊行された

『サントスの御作業の打抜書』1591年

『ドチリナ・キリシタン』（ローマ字本・東洋文庫蔵本）1592年

『ヒイデスの導師』1592年

は『平家物語』前半と同様の分かち書き基準で表記されており、それ以後の刊行になる

『コンテンツス・ムンヂ』（ローマ字本）1596年

『ドチリナ・キリシタン』（ローマ字本・水戸徳川家蔵本）1600年

『日葡辞書』1603・1604年

『スピリツアル修行』1607年

は『平家物語』後半・『イソポのハブラス』・『金句集』と同様の文節単位の分かち書きがされていることはすでに先行研究によって知られている（井上章（1961）・福島邦道（1979））。分かち書き方法の変更は、個人的な方針の変更といったようなものではなく、基準の変更は個人を超えた教団内での取り決めであったわけである。

8.3.　〈語〉単位の分かち書きは形態重視、文節単位の分かち書きは機能重視というちがいはあるが、〈語〉単位の分かち書きの方が、文節単位の分かち書きより学習しやすいということは特にないから、分かち書き基準の切り替えは易から難へという学習上の配慮による意図的なものとは考えられない。それどころか、分かち書きの基準の変更箇所は、「巻第三・第十一」の途中であり、内容上の切れ目ではなく、文の切れ目ですらない。切り替え前後では混乱も見られるから、むしろ学習者にとっては有害な影響を与

えるものになったことだろう。

8.4.　分かち書き方法の一応の切り替え箇所である207ページは、実は組版の台の変わり目すなわち八折本（オクタヴォ）としての折丁の（ページ下部に印刷された折記号によればN記号からO記号の折への）変わり目なのである。つまり、切り替え箇所は印刷上の都合によって決まったのである。切り替え箇所がこのように印刷上の都合によって決まっていること、一冊の本の中での分かち書き法の不統一が修正されないまま残されていることから見て、翻字の全部終了を待たずにできた分からどんどん版が組まれ印刷されていったという製作の過程が想定できる。そのため、分かち書き方針の変更のような、ページを大きく動かしてしまうような変更は、せいぜい同一の版内でしか遡及しておこなうことができなかったということなのであろう。

8.5.　書物全体の最初に置かれた総序とハビアン自序は、後半と同じ文節単位の分かち書きが行われているが、これらは『平家物語』が後半まで完成後、別に印刷されて冒頭に綴じ込まれたというものではない。これらのページ下端に付された折記号が、扉・序文類：（最初のAの表示は扉に当たるためなし）・A2、『平家物語』本文冒頭：A3・A4と続いていることから、〈語〉単位の分かち書きの『平家物語』本文冒頭とおなじ版台に組まれたひと続きの折丁であったことがわかるからである。『平家物語』本文の翻字者が〈語〉単位の分かち書きをしていた段階で、総序とハビアン自序の翻字者は文節単位の分かち書きをしていたことになる。教団全体で一斉に〈語〉単位の分かち書きから文節単位の分かち書きへ移行したわけではなく、両者が人によるちがいとして並存していた時期があったのであり、『天草版平家物語』はたまたまその長くはなかった過渡期の状況を化石化して今日に伝えているのであろう。

注

1　土井忠生（1942）p.56。ただし、同書には分かち書き基準の変わり目は「二一〇ページ前後から」とあるが、これは井上（1961）で指摘されているように、「ほぼ206ページと207ページの間を境として」とするのが正しい。

2　土井忠生（1942）p.57に「三書が合綴されてゐて」とあることなどから、往々誤解されているが、もともと別々の書物が大英図書館書蔵本では一冊に合綴されているというのではなく、もとから三部構成の一書であって、ノンブルも一連のものがふられている。

3　組版スペースの関係で、分かち書きを無視してむりやり活字を詰め込むこともあるので、前半の「▽」の連続中に散在する「◆」にはそうした事情によるものも多いことが想定される。

　なお、ヨリ・マデは名詞と分けての表記が全巻通してみられる点で他の格助詞とやや異なるが、名詞と続ける表記がほぼ後半のみに限られる点は共通である。

4　前代史料とのちがいを時代差ではなくローマ字翻字者の母語方言との方言差と見ることもできようが、『天草本平家物語』は序文に明記されているように外国人聖職者のための日本語口語のテキストであったから、その規範的性格からしてそうした可能性はほとんどないであろう。

5　この前後の時期に京都方言では、アクセント体系を古代の体系から近代の体系へと大きく変える大変化が起きているが、『天草版平家物語』の分かち書きはアクセントそのものの資料ではないので、この変化の前のものなのか後のものなのかまではわからない。

6　幕末・明治初期の〈語〉の大きさは現代と同じ。

7　〈語〉を認めても、文節という単位は不要にならないが、伝統文法の「単語」の方は、単位設定を誤っているので〈語〉と形態素とに振り分けて解消されなければならない。

資料

キリシタン資料：既刊の複製本による。
『日本書紀』声点本：複製本による。鈴木豊（2003）により確認。
『四座講式』：金田一（1964）による。
『御巫本日本書紀私記』：上野（1984）による。

参考文献

井上　章　（1961）「天草本伊曽保物語の分かち書きについて」『言語生活』120号
上野和昭　（1984）『御巫本日本書紀私記声点付和訓索引』アクセント史資料研

究会
金田一春彦（1964）『四座講式の研究』三省堂
進藤 咲子（1961）「前島密の分かち書き ── まいにち ひらかな しんぶんし を資料として」『言語生活』120号（『明治時代語の研究』明治書院 1981年 所収のものによる）
菅原 範夫（1989）「キリシタン版ローマ字資料の表記と読み」『国語学』156集（『キリシタン資料を始点とする中世国語の研究』武蔵野書院 2000年 所収のものによる）
鈴木昭 編（2007）『資料に見る点字表記法の変遷 ── 慶応から平成まで ──』日本点字委員会
鈴木　豊（2003）『日本書紀人皇巻諸本 声点付語彙索引』アクセント史資料研究会
土井 忠生（1942）『吉利支丹語学の研究』靖文社（新版 三省堂 1971年 による）
服部 四郎（1950）「附属語と附属形式」『言語研究』15号（『言語学の方法』岩波書店 1960年 所収のものによる）
福島 邦道（1979）『サントスの御作業 翻字研究篇』勉誠社
屋名池 誠（2004）「平安時代京都方言のアクセント活用」『音声研究』8巻2号
屋名池 誠（2004）「活用の捉え方」『新版 日本語教育事典』大修館書店
屋名池 誠（2011）「語彙と文法論」『これからの語彙論』ひつじ書房

謝辞

昨年春、科学研究費基盤研究（A）「室町～江戸期における写本と版本の関係についての総合的研究」によって大英図書館で『天草版平家物語』の原本を閲覧する機会をえた。共同研究の代表者である石川透氏、閲覧に当たって種々ご教示にあずかった同行の佐藤道生氏、佐々木孝弘氏、堀川貴司氏、ご便宜をはかっていただいた大英図書館のご担当の方々に厚く御礼申し上げる。